

古代くん広場



王塚装飾古墳館の
マスコットキャラクター 古代くん

第33回全国中学生人権作文コンテスト

「未来を築くのは私たち」 桂川中学校生徒が入賞

桂川中学校2年生の大浦薫司おおうら くんじさんが、第33回全国中学生人権作文コンテスト福岡県大会で奨励賞を受賞し、桂川町人権擁護委員の樋口惇ひぐちあつしさんから表彰状が渡されました。

今回入賞した作文を全文掲載します。大浦さんの作文をきっかけに、身近な人権を考えてはいかがでしょうか。



▲奨励賞を受賞した大浦さん。

未来を築くのは私たち

桂川中学校 二年一組

大浦 薫司

ぼくは先日、保護司の方、それと人権センターで働いていらつしやる2人の講師の方々から人権とどう向き合うべきなのか、そのためにどのようなお仕事をしていらつしやるのかなど、たくさんのお話をしていた。

ぼくは、6年生の頃に、人権の事は習っていたけど、この学習をするまで正直よく分かっていなかった。しかし、今回講師の方のお話を聞き、ぼくの人権に対する思いが大きく変

わった。

まず、保護司の方は、今ぼくたちが通っている桂川中学校がひどく荒れていた頃の実態、そしてそれをどう立ち直らせていったのか、またそれにたずさわった方々の想いなどを話して下さった。これを聞いてぼくが感じた事はたくさんあった。しかし、ぼくが人権への思いを強めたきっかけとなったのは、その次に講師の方が話された一つの童話だった。

ある家族がいて、おじいちゃんはどうも大分歳を取っていて、手も不自由だったので、みんなと食事をしてる時に、陶器のお皿を割ってしまった。だから家族は、おじいちゃんのお皿を、割れない木で出来たものに変え、家族が食事をしているテーブルから外し、暗くてせまい場所で食事をさせた。

ある日、子がもくもくと木を削り、何かを作っているのを見て、母親が、「何を作っているの?」とたずねると、子は、「お母さんがおばあちゃんになったら木のお皿が必要になるから作っているの」と答えた。それを聞いた母は、おじいちゃんのお皿を陶器のお皿にもどし、以前のように家族みんなで食事をするようになった。

ぼくは、この童話を聞いて初めて

人権に対する思い、決意が自分の心の中で生まれたような気がした。

差別がなくならないのは、自分の親や大人が差別しているのを子は見えて育ち、その子が大人になった時に同じ事をする。だから、差別問題が無くならないのだと思った。

大切なのは、まず自分自身が差別をしないこと。今後の世の中は、ぼくたちが築いていかないといけないという事をこの学習から学んだ。

今回の人権学習で、ぼくたちにたくさんのお話を教えてくれて、大切な事を気づかせてくれた二人の方に感謝し、そして学んだ事を今後の生活や、大人になった時に生かせるようにしていきたいと思った。

短い時間だったけど、ぼくにとつては今後の世の中を築いていくために、とてもいい経験になったと思う。

